

六十年目の再会 そして 「ふるさとツアー」 参加

八五五市

竹内孝（西城町一丁目出身）

昭和二十年の正月、いよいよ空襲が激しくなり、祖父の出身地高田に一家で疎開しました。二十年は大雪の年で堀端の家（西城町一丁目）は雪の中にすっぽり埋まっていました。前の堀は一面の雪の原。雪がきえると手前が田んぼ、中が葦の浮島、その先が蓮の生い茂る外堀になっていました。

小学三年の三学期から六年の正月まで、高田師範の附属に通っていました。冬はスキーを履いて堀を渡りだんし山で滑り、春のお城の桜は印象が薄く、それより浮島で鴨やパンの卵探しに精を出しました。夏は田んぼの畔道でトンボつり（キンヤンマ）、蓮の花は祖母に仏様の花と教えられ、清々しい姿と色彩が脳裏に刻まれました。真夏の浮島はヨシキリだけがけたたましい囀りを上げていました。その後

滅多に出会うことのない蓮の花と葦切りの鳴き声に遭遇すると、高田のお堀を思い出します。図画時間の写生ではお堀端に出て金谷山、なんば山を裾野にした妙高を画きました。秀麗な妙高の姿は上越の方は誰もが忘れられない山と思います。

今は浮島と田んぼは整理され、本来のお堀の姿になり、対岸に橋が架けられたと聞きました。浮島からのヨシキリの切なく激しい囀りは聞けなくなった替わりに、蓮の花は見やすくなったことでしょう。

ところで、蓮の花は夜明け前の闇の中で咲くのだそうです。その時、花の開く音がするそうです。この度再会した庄山さんか伺いました。高校のとき、どうしてもその蓮の花の開く音が聞きたくて、兄

の友達にバイクのお尻に乗せてもらい、晩間のお堀に三日通つてようよう聞いたそうです。「母もさぞ心配だったと思うのですが、気持ちよく出掛けさせて貰い感謝しましたとお話して下さいました。いいお話です。お堀の蓮の花は上越の心を育ててくれたのです。若い方達にこんな環境は更に整備して上げて欲しいものです。

父と祖父は終戦から間もなく焼け野原になった東京に戻り、敗戦が私を怖い親父から開放してくれました。上越は後にも先にもない伸々とした時代でした。そんなこともあってか、その後住んだ何処の土地よりも私は上越が好きです。

しかし乍ら、上越の方達との縁は遠のいてしまい、高校の頃二人の友達と会っただけで全く音信不通になっておりました。それがこの夏、皆様のご好意で見つけて戴き注、六十年振りの再会となりました。

子供の頃からの長い付き合いでは、途中で三年、五年と、時には十年間も会えないこともあります。「点々付合」とでも言うのでしょうか。それにしても、小学生で別れ、その後全く音信不通で六十年経過すれば浦島太郎です。仮に何か消息が分かっていたら、会う気には仲々ならないも



のと思うのです。ところが、七月に八名の小学生時代の仲間が迎えて下さったのです。その素早さと結束のよさは恐れ入りました。これは上越の皆さんの人柄に依るものと思いました。その一人からのメールには「おまん来なつたかねー。待つていたわね」の心境ですと書かれていました。嬉しい限りです。私も上越に本籍を持ち、お墓も金谷山にあります。ふるさとを上越にしているのですから、皆さんと同じ様に暖かい心で残りの時間を過ごしたいと思いました。

そして、今回の十月末の「ふるさと

ツアー」への参加となりました。いい旅でした。行きに内藤 實君と湯沢で一泊ぶらり居酒屋で一杯。旧友というには余りにも間が開き過ぎた二人でしたが、お互い何の気かぬもない旅のスタートが切れました。居酒屋はいい店でした。酒もつまみも美味く、おかみが美女で愛想がよく、娘さんはびちびちの器量よし。加えてお値段が格安でした。明日からのツアーが楽しみにになりました。

直江津の駅には青山 晃君(ネット会員)が出迎えてくれました。神戸から奥様と母上の見舞いに来られているとのことでした。牧地区は旧高田市内から離れており、私には初めての所でしたが、宮口古墳群は附属のとき何処であつたか古墳に行つた記憶を呼び戻してくれました。バスで上つた牧峠への道は、狭い棚田を細く曲がりくねつた道が上へ上へと伸びており、前から車が来たらと心配しながら峠に着きました。広く開けた山の斜面一面にブナの原生林が広がり、秋空の下見事な景観でした。峠付近にはオオカミ観測の車が来ており、豊かな自然が残っている様です。人はこれ以上自然に踏み込まない様にしたいものです。

私はこの頃、どんな絶景より山あいの田んぼの見える景色が好きです。稲刈りの済んだ田んぼでしたが、牧地区は随所がいい景色を見せてくれました。

宿の深山荘に仲町の山本忠司君が訪ねてくれ、暫し、旦下部、庄山、杉臣夫妻、内藤君と旧交を暖めました。翌朝、朝市でちまきや大根、このみ、乾瓢などを見ている内に、疎開していたとき、はたけの婆ちゃん」と採れ過ぎた野菜を朝市に売りに行ったことを思い出し、つい買い過ぎしてしまいました。

バスがお城の裏手まで来ると、旧友達が道の説明をしてくれたので、私の六十年前の記憶と重なりました。榊神社を右折すると道路は拡幅されており、立派なビルが並び、左折して青田川を渡つたとき、川幅の狭さに子供の見る目の違いを痛感しました。翁飴をお土産に買い、帰りは同級生4名で篠ノ井線の明科で一泊、安曇野のワサビ田、松本城で馬刺しで蕎麦、帰りの電車でゆつくり更に親交を深めて締めくくりました。いい旅でした。

上越の人柄の良さは若い市役所の渡辺さんに引き継がれており頼もしく、上越はやっぱりいい町でした。

(注) 1 年上の有沢栄一氏(有沢製作所会長の同級の山本忠司君(高田高校の体操の名選手)に連絡をとつて下さつたことで、東京の内藤 實君(ネット運営委員)が皆さんに連絡をして下さい下さつて六十年振りの再会となりました。

添文 消息不明の疎開仲間は何人もいます。が、びつくりしました。

私も背の高い大人しい子だったと記憶していました。

このような投稿に話題が昔にタイムスリップするでしょう。

七月の六十年ぶりの再会の席上、彼は田村玲子さん(大手町通りの田村スタジオの娘で現在は米国在住)でまたま帰国中に昔の作文を渡していました。

内藤



成島さんによる古墳の説明



10年若返りの清水



宮口古墳公園